

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻63号 平成21年2月1日発行

「修身教授録」探求（第二十八回） 十四 弟妹に対する道 森 信 三

あなた方のうちには、弟妹の無い方も無論多少はありましようが、しかし多くの人は先づ一人二人はあると見てよいでしょう。私はすべて世の中の事は、普通に人の経験する範囲の事柄は、自分もまたこれを経験するがよいと思うのです。そこでいま兄弟ということについても、兄弟のある人と無い人とは、どことなしに違おうようであります。人柄もよいし、心掛けも悪くないという人でも、一人育ちの人というものは、どことはなしに我儘な甘え心の抜け切らない処のあり勝ちなものであります。現に私などもそのよい実例でありまして、一人で育ちました為に、よい年をしながらいつ迄たつても一人育ちの我儘がとりきれないのです。若しこれが兄弟と共に育つていましたら、もう少しは我儘も直つていたことだろうにと時々思うことであります。そこであなた方も兄弟のある人は、有難い事と思つて、仮りに言争いなどする様なことがあるとしましても、その争いそのものが、やがて又自分の欠点を知らされる絶好の機会であると思つて、兄弟持つ身の辱けなさに思い到るといふ様にありたいもので

す。

さて一口に兄弟の道と申しましても、兄弟と姉妹では又そこにそれぞれ趣の相違がありましようが、今日はそのうち、自分より年下の弟妹に対してどうすべきかということを考えてみたいと思ひます。弟妹に対する道としては、労り愛すると共に、更に之を教え導くべきでありましよう。さて一応それに間違ひはないと致しましても、そのうち労り愛するということに対しては先づ問題はないでしょうが、教え導くということになりますと、もしこれが本當に、出来れば実に此の上ない結構なことであります。しかしこの方は余程深い注意が要ると思ふのです。と申しますのは、兄弟の間柄というものは言うまでもなく同じ血を分けた間柄でありますから、非常に親しくて気安い間柄であります。そこで今あなた方が非常に立派に出来ていまして、弟さんや妹さんの方から言えば、尊敬というよりはやはり気安い親しみの情が勝つものです。その上毎日それこそ朝起きる時から夜寝るまで起居を共にする間柄でありますから、それこそお互いの裏面というものが真の裏まで見え透いていく訳です。つまり姉さんとしてのあなた方が、お母さんに呼ばれても時々返事が渋つたり、更にはふくれたりすること迄ちゃんと弟や妹の眼にも全部映っている次第です。或は又朝の起き

際が悪かったり、乃至は着物や書物の整頓が良くないとか、斯様な事柄に到る迄皆分りきっている間でありますから、そこで成程姉さんとしてのあなた方の言われる言葉そのものには、何等間違いが無く尤も千万であるとしても、さて相手としての弟さん妹さん達としては、必しも一々「ハイハイ」とは聞き難いとなりますであります。勿論弟妹として姉の言を聞かないのがよいと申すのではありませんが、ただ実際問題としましてはとかくそうなり易いというのであります。

そこで私の考えますには、あなた方が姉として弟さんや妹さんなどに対する態度としては、一応先づ労り愛するという事に止どめるがよいはないかと思ひます。そして躰けようの教えようのという気持はむしろ自分の間持たない方がよいでしょう。即ち未だ自分さえ出来てもいなくせに、なまじいに躰けようなどはしないことです。弟さんや妹さん方を教え躰けることは、すべてこれを御両親なり、又は年のいっていられる兄さん姉さん方にお委せ申して、あなた方としては只共々に仲好くして労り愛するというのがよいでしょう。そこで叱言とか指図がましいことは成べく言わないようにする。そうして物一つ言うにも成るべく和やかにする。即ち和顔愛語です。そうして暇でもあれば、姉さんらしく何

か身につけるものでも編んでやるとか縫つてやるとかする。すべて斯様な方向に心の向きを変えて見たらどんな結果になるでしょう。

総じて人間というものは、叱られるよりも賞められる方を喜ぶものです。そこでどうしても叱るより賞める方が効果があるわけです。なるほど弟さん妹さんにも色々直すべき所もありはしましうが、しかし自分の間それには手を触れないで成るべく相手のよい方に限をつけて気を引き立たせるようにするのです。すると相手もいつしか自分の欠点にも気が付いて、ひそかに之を改めようとする様にもなるものです。人間は自身の欠点を他人から言われたとて、仮りに心にはなるほどと思つてもいざ実際となると仲々直り難いものであります。勿論それがよいというのでは決してありませんが、同時にそれが普通の人間の凡情であります。そこで今弟や妹さんなどを教えようの躰けようのというそういう柄にない考へは打捨てて、唯姉として出来るだけの世話をする。若し小学校へ行っているような弟妹ならば、例えば冬向きにでもなれば、お弁当袋を編んでやる。すると毎日学校でお弁当を開く度に、あなた方のことを思い出すであります。或は時によると、「これうちの姉ちゃんやが編んでくれたんや」とお友達に誇らかに話すこともあるでしょう。

う。或は更にチョッキを編んでやるとか、又小さい人には靴下を編んでやるとか、すべて姉としての心遣いを忘れぬことです。総じて少年の日に姉から心のこもったものを作つて貰う程世にも悦しい事は無いでしょう。

最後に家に小さい赤ん坊などのある人は、せいぜい世話をするがよいでしょう。それがやがて結婚後我が子を持った場合の最もよい準備になります。どうも世間を見てみますと、弟妹が無くて娘時代に子供の世話やおんぶをしたことの無い人は、結婚後自分の子供を育てるに当つても概して手抜きを生じやすいようです。実際世の中は正直そのものであります。そこで小さい弟妹のある人はうるさいなどと思はず、全く天のお授けと思つてよくお世話をなさるがよいでしょう。するとそれがやがて廻ぐり廻つて我が身の為になる日も来るものです。実際学校に行つてゐる娘さんが、日曜日のひとときを小さい弟さんや妹さんなどをおんぶしたり手を引いたりして、家の廻りで遊ばしている様は、この世に於て最も床しく親しみ深い情景の一つといふべきであります。

（西池いと記）

（「修身教授録」第四巻同志同行社昭和15年刊）

森信三先生の短文紹介
論文 国家新生の原理 第一回

森 信三

終戦を国外に迎えた私は、その後数ヶ月の日子を全く読書三昧に過ごしたのであった。

それはある意味では、私の海外生活を7ケ年の間で最も真剣な読書生活の期間だったということができる。私の出張不在中に家族は疎開していたので、帰宅後は長男と学生三名という男世帯の生活であった。その間種々の外的圧迫と不安があったとはいえ、読書以外に何事も為しえない私にとっては、最も充実した読書生活ができたわけである。

私がかねて読みたいと思いつつ読み得なかつたもの、またかつて読んだことのある書物ではあるが、敗戦という未曾有の重大事を機として今一度読み直してみたいと思うものなどを貪り読んだのである。しかし今はそれらの読書のいちいちについて述べることはできないし、またそれをしようとも思わない。終わりの頃にはロシア文学を多く読んでいた。ドストエフスキーの小説などは最後まで読んでいたものである。しかし当時の私の読書を貫く根本理念は言うまでもなく、国家再建の原理を求めてであった。私は初め岡倉天心を読み直し、「靖献遺言」（浅見嗣斎著）を読みなどをして

みたが、日本の再建は到底これらによつてできるものではないことは、終戦後間もない当時であつたが、なんとはなしに観じられた。そこで私は、ホーソンの「緋文字」を読み、エマーソンの論文集、ホイットマンの「草の葉」などを読み、さらに「アミエルの日記」「アルプス登はん記」などと私の読書は私の性格に応じて、ずいぶん多角性を示したが、しかしそれらの現象的多用を一貫する底流は、どこまでも国家再建の原理を求めてであつた。今はこれらの読書による収穫の委曲について述べることはできないが、そのうち最も原理的なる点について述べてみたいと思う。

以上をはじめとして、その他種々の書物を読んだが、しかし直接国家再建の原理を述べた書物としてはさまざま多くはなく、そのうち最も顕著なものは何としても、ヒットラーの「わが闘争」を看過することはできない。かつて室伏氏の抄訳でしか読んだことない私は何としても一応この書を一読すべき必要を感じたのであつた。そうして私はそれをとりあえずまず、石川準十郎氏の「マインカムプの研究」によつて読もうとしたのであつた。この石川氏の書物は玄人筋で名著の名をほしいままにしているだけあつて「マインカムプ」に対して、眞に到らざるなき徹底した研究的註解書といつてよい。いわば「マインカムプ」という一

つの地上建築に対して、その地下工事を余すところなく発掘して見せてくれる観がある。この書は三冊で「マインカムプ」前半の註解にとどまるというほどに詳細精密なものであるが、なおかつ読者を飽かしめることなく、最後まで引きずっている力は、思うに著者の人となりがこの書の著述を以て単なる研究的興味のみに止めなかつた故であろう。

さて私の最初の計画では、この石川氏の註解を一読してしかるのち「マインカムプ」の本文を全訳によつて改めて最初から読むつもりであつた。何となれば石川氏のこの書は前にも述べたように「マインカムプ」の前半の註解にとどまっているからである。しかるにこの三部冊を読みおわつた私は、もはや最初の計画通りに「マインカムプ」を初めから全訳で読み返そうという意志を持たなくなつた。と言うのは、私はこの書を通して「マインカムプ」の根本性格を知ると同時に、日本国家の再建には「マインカムプ」は全く無用の書であることを知るに至つたからである。私がこの書を読みここの結論に到達したのおそらく終戦後一ヶ月ぐらいいか経たないころであつた。祖国の事情の分からぬは言うまでもなく、国外にある我が身自身がいかにか成りゆくかさえ全く見当のつかなかつた当時のことではあるが、しかも私は石川氏の著書を通して

味わっただけでも、日本の再建にとつて「マインカムブ」は全く無縁の書であることを痛感するに至ったのである。

しからばそれはいかなる理由によるのであろうか。「マインカムブ」において、ヒットラーの力説している要点を約めていえば、大体次のようになるであろう。すなわちドイツが第一次世界大戦に敗れたのは前線の失敗もさることながら、直接には銃後が、手を挙げたからであり、而して銃後が手を挙げたのは、社会主義思想が国内を風靡した結果である。しかもこの社会主義思想を国内に瀰漫せしめたものは、国内ユダヤ人のせいである。故にドイツの再建は、純粹ゲルマン民族の結束と、国内ユダヤ人の徹底的追放あるのみというのが「マインカムブ」を貫く根本主張と言つてよいであろう。

さて私がそれについて先ず奇異の感を抱いたのは、ヒットラーのこの主張には何ら反省的色彩の認められないということであった。いかなる理由をあげ得るにしても、とにかく戦いに敗れたということは絶対的事実であり、従つてこの絶対的事実を招来せしめた原因は無数に存するはずである。そしてそれらの無数の敗因と呼ばれるべきものは、当該敗戦国民の犠牲の自省の立場からはその何れもが、自民族の欠陥として観ぜられるべきはずである。しかるにヒッ

トラーの「マインカムブ」におけるや第一次世界大戦においてドイツの敗れたる原因を徹底的に国内ユダヤ人に帰して、ドイツ民族そのものには何ら責任なきかの如き調子である。

私は以前室伏氏の抄訳で一覽した場合に、この点についてそれほど気づかなかつたが、この度、石川氏の書によつて読み直すことによつてこの根本の一点に関して、はなはだしく奇異の感を抱いたのである。そうしてこの全く無反省な態度こそやがてドイツの今回の敗戦の根本原因をなすものなることを痛感するに至つたのである。戦いに敗れながらなおかつ何ら自己の民族について反省するところがなく、ただ国内にユダヤ人へのみその責めを帰して非人道的追放を敢えてしたところに、ドイツ今回の敗戦の最大原因は存するというのが、要するに私が石川氏の書を通して得た感想である。したがつて、石川氏の著書そのものには異常な迫力を感じつつも、当の「マインカムブ」そのものに対しては全くわれに用なき無用の書なりとの感懐をもつて終始したのである。

（開頭創刊号昭和22年3月号）

あとがき

森信三先生の「短文紹介」は今回から新しく「国家再建の原理」を連載する。これ

が終戦直後から森信三先生の命題として焦眉の急であった。この問題にどこから手をつけるべきかを模索されたのである。難しい文章だが先生の読書歴を垣間見るだけでもおもしろいと思う。一学者が人知れず、国の行く末を案じていた。今日、日本の政治の実態は、党利党略が本旨である、ことは誰の目にも明白。情けない限りだ。

（二繁）

HPは<http://web1.kcn.jp/syusin/>

T 63330003

桜井市朝倉台東二丁目五三八一八九

TEL・FAX 0744-4513422

TEL・FAX 0744-4513422

E Mail: hiji@kcn.jp

「かよう会」のご案内

日時 平成21年2月17日(火)
18時30分～
(毎月第三火曜日原則)
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル管理事務所)
06-6531-3686
交通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。徒歩
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
2/17「非標的態度というもの」
3/17「一日の意味」
4/21「ベストロッチ」
参加費 1000円